



TITLE:

チャーマーズの恐慌理論

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. チャーマーズの恐慌理論. 経済論叢 1934, 38(2): 511-528

ISSUE DATE:

1934-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130417>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第二號

第三十三卷

昭和九年二月一日發行

論叢

印紙税に就きて……

法學博士 神戸正雄

購買力……

經濟學博士 小島昌太郎

チャーマーズの恐慌理論……

經濟學博士 谷口吉彦

時論

農村經濟更生運動の目標……

經濟學士 八木芳之助

研究

會計學に於ける取引の概念と形態……

經濟學士 蜷川虎三

米國新産業政策の一斷面……

經濟學士 大塚一朗

資本蓄積率變化論補遺……

經濟學士 柴田敬

說苑

グットウィルに關する一研究……

經濟學士 熊本吉郎

本邦製紙業に於ける混合企業と單純企業……

經濟學士 田杉競

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

チャーマーズの恐慌理論

谷 口 吉 彦

目 次

- 一、チャーマーズの社會的存在
- 二、チャーマーズの經濟學
- 三、チャーマーズの蓄積理論
- 四、チャーマーズの恐慌理論

一、チャーマーズの社會的存在

Thomas Chalmers (1780—1847) は寧ろ宗教家または社會改良家として知られ、彼れの經濟學は、一般の經濟思想史または經濟學說史においては、多く問題とされざるものである。併しながら一たび J. S. Mill の『經濟學原理』を読むものは屢々 Chalmers の名に遭遇するであらう。そしてその多くの場合は、かのマルサス、シスモンヂと相並んで、セイ、リカルド、父ミルと相對立して、擧げられてゐるのを見るであらう。之は即ち恐慌論者としての彼れの地位を暗示してゐるものと言へる。

チャーマーズは一七八〇年スコットランド、Fifehire の East Anstruther において、富裕な商人

の第六子として生れ、St. Andrews University に入つて教育をうけ、すでに十六歳の少年にして、異常な才能を有する天才兒として、その才名を市民の間に謳はれてゐた。一八〇三年大學を卒業すると共に、數學の助手として母校に残り、同時に近郊のキルメニー教區に牧師として就職した。¹⁾それはミルの出生に先だつ三年であり、マルサス人口論第二版の出版された年であるから、彼れはマルサスよりも十數年後れて生活し、ミルよりは二十餘年を先んじて生活したわけである。

數學者としての研究生活と、牧師としての教化生活と、二重の生活に悩まされたであらう若きチャーマーズは、數年ならずして自己の進むべき一つの途を選択したやうである。即ち一八〇八年に出た彼れの最初の著述は、『國民富源の擴張および安定に關する研究』(An Inquiry into the Extent and Stability of National Resources, 1808)と題する經濟學に關するものであつた。これは勿論かれの牧師としての教化生活から、國民の經濟生活に關心を移して行つたからであるが、同時にまた當時のイギリスの状態に強く動かされたものでもある。

これより先き一七九三年に勃發したナポレオン戦争は、一八〇二年のアミアン條約により一時的の休戦状態に入つたが、翌一八〇三年には再び英佛の開戦となり、一八〇六年にはベルリン宣言による大陸封鎖となり、イギリスの商工業は一大危機に襲はれた。彼れの最初の著述は即ちかかる形勢において構成されたものであり、恰かも今日の國民主義勃興の時勢に酷似する時代である。『國民富源の擴張および安定に關する研究』といふ彼れの書名が、恰かも今日の新刊書でも

1) Hunter, H., Chalmers's Problems of Poverty, Introduction, p. 10.
Bonar, J., Chalmers, Thomas (Palgrave's Dic. of P. E. Vol. I, p. 255.)

あるかの様に聞える許りでなく、その内容は重農主義の主張と重商主義の排撃、ことに貿易輕視論にたつ大陸封鎖の樂觀説であり、彼れのこの思想は、後の『經濟學』にまで終始一貫することとなつた。¹⁾この點においても彼れはマルサスの重農的主張に近く、²⁾従つてジェームス・ミルの『商業辯護論』に對立するものである。³⁾

一八一五年彼れは招かれてグラスゴー市のトロン教區に牧師となつたが、これが機縁となつて、經濟學に對する彼れの興味は、この教區の救貧事業と相結んで、彼れの思想と事業とを、つよく特徴づけることゝなつた。當時のトロン教區は一萬一千の人口を包含してゐたが、彼れは牧師に任命されると同時に、各家庭の戸別訪問を始め、且つ家庭の狀態を記入して、遂に之を完成した。之によつて彼れは、その三分の二は全く無宗教の狀態にあり、且つその多數は甚だしき貧窮狀態にあることを知つて、宗教教化と經濟問題との關聯を體驗し、また經濟學に關する彼れの興味は、貧民問題を中心としてますゝ強められ、實際運動としては教區による自治的救貧を主張し、國家による當時の救貧法を排撃した。⁴⁾この點においても、彼れはマルサスの主張と一致する所が多い。

彼れの自治的救貧の主張は、救貧法の行詰りに悩んでゐた當時において、世の注意を喚起するに十分であつた。當時の救貧問題は、恰かも今日の失業問題に相當し、甚だ困難なる社會問題であつた。そこで自治的救貧の主張に動かされた市の當局では、彼れのためにセント・ジョーン教

- 1) Chalmers, T., On Political Economy 1832, Chap. VI., On the Limits of a Country's Foreign Trade. M'ulloch, J. R., Dr. Chalmers on Political Economy (The Edinburgh Review. Oct., 1832 p. 71) Bonar, J., *ibid.* p. 255.
- 2) 拙稿、マルサスの地代論に就いて (本誌 XVII, 5, 6.)
- 3) 拙著、恐慌に關する諸學説 (改造社版、經濟學全集 第十四卷) p. 101.
- 4) Hunter, *ibid.*, p. 10-11.

區を作つて、こゝにその主張を實現せしめんとし、一八一九年彼れは牧師としてこゝに轉任することゝなつた。彼れの任期は四年に過ぎなかつたが、併しその計畫は成功して、その後二十年間も繼續した。この任期中に彼れは三卷より成る大部の勞作を成した。『大都市の宗教的および市民的經濟學』(The Christian and Civic Economy of Large Towns, Vols. III, 1821, 1823, 1826.) である。

一八二三年彼れは母校のセント・アンドリュース大學に招聘せられて、道德哲學の教授となつた。こゝで彼れは、特に經濟學を志望する學生のために別級を作つて講義し、これが發展して後に彼れの『經濟學』となつたものである。¹⁾ 次いで一八二八年にはエジンバラ大學の神學教授として招聘せられ、在職十五年にして一八四三年のかの歴史的なスコットランド國教分離運動に遭遇した。こゝで彼れは再び宗教運動に轉じ、忽ちにして時代の英雄となり、一世を指導することゝなつて不朽の名を宗教運動史に残すことゝなつたが、それは今われ／＼の直接の問題とする所ではない。

チャーマーズの經濟學は、一八〇八年の『國民富源……に關する研究』から出發して、一八二一—二六年の『宗教的および市民的經濟學』において宗教と結びつき、一八三二年の『經濟學』(On Political Economy) に至つて完成されたものであるが、彼れの經歷から來る必然の結果として、その『經濟學』もまた可なり特徴を有するものであることは、この書の標題が、『道德的狀態およ

1) Hunter, *ibid.*, p. 12.

び道德的將來との關聯における經濟學に就いて』とあることによつても明らかであらう。以下われ／＼は主として、經濟學に關する彼れの主著たるこの書を中心として、彼れの恐慌理論を探らんとするものであるが、それに先だつて彼れの經濟理論一般の特徴につき、一瞥せねばならぬ。尙ほ彼れの經濟論文集は、後に一九一二年に至りハンター氏によつて編輯せられ、救貧問題の論集と共に一冊をなして、『貧窮に關する諸問題』(Problems of Poverty, selections from the economic and social writings of Thomas Chalmers, 1912)として出版されてゐるが、これには恰もわれ／＼の問題とする彼れの主張に關する部分は逸脱してゐる。

二、チャーマーズの經濟學

チャーマーズの『經濟學』が出版されるや否や、當時の經濟學者をもつて自他ともに許してゐたマカロックは、直ちにその評論をエジンバラ・レビューに發表してゐる。¹⁾チャーマーズの思想は多くの點においてマルサスに近く、従つてリカルドに遠く、従つてまたマカロックに對立する所が多い。それ故に右の評論は寧ろチャーマーズに反對を表明するものであり、之に對してはチャーマーズもまた別にバンフレットをもつて反駁した程であるが、併しまた他面ではよくチャーマーズの特徴を明らかにしてゐるとも言へる。マカロックは言つてゐる。

『チャーマーズ博士の書物の中には、たとひわれ／＼の是認しがたき多くのものがあるとは言へ、そこにはまた高き推稱に値

1) The Edinburgh Review, Oct., 1832. No. CXI, P. 52. Dr Chalmers on Political Economy.

する多くのものがあり、注意ぶかき研究に値しないものは一もない。それは思想の獨創性の大きな點と、文體の力強い點とを特徴とする。若しもチャーマーズ博士が、もう少し經濟學の原理に通曉してゐたとしたならば、彼れの書物は恐らくその價値を減じたであらう¹⁾』

ジョン・スチュアート・ミルもまた多くの點においてチャーマーズに對立するものではあるが、彼れの特徵につきミルの見るところもまた、ほぼマカロックに一致する。

『……この單純なる説明が、チャーマーズ博士より以前には、(私の知る限り)如何なる經濟學者によつても與へられなかつた。この著書の意見の多くは、誤謬であると私は思ふが、併しながら常に現象を *at first hand* に研究し、且つ彼れ自身の言葉をもつて之を表現するの長所を有し、このことが慣用語では隠されてゐた真理の側面を屢々發見させることゝなつた。²⁾』

マカロックおよびミルの批評によつては、想像せらるゝ如く、チャーマーズの經濟學は極めて獨創性に富んだものであるだけ、それだけ獨斷や誤謬に陥る危險も免れなかつた様である。この獨創性は彼れの天賦の資質より來るものもあらうが、またミルの指摘するが如くに、現實社會の現象を *at first hand* に把握して、他人の著述や意見を通じて *at second hand* に研究する方法を避けたからであらう。マカロックの指摘するが如くに、彼れは當時の經濟學に通曉してゐたとは言ひ難い。けれどもそれだけ從來の理論に捉はるゝことなく、卒直に現實の事實を直視して、そこに新たな理論を發見しうるの長所を有してゐる。second hand 研究者の餘りに多い今日の學界にとつては、もつて多少の参考とするに足るであらう。殊にかゝる研究方法は、當時の如き、また今日の如き社會經濟の變革しつゝある時代において重要である。彼れの經濟關係の著述は、さきに述ぶるが如く、ナポレオン戦争の大陸封鎖時代から出發して、大體においてイギリス産業

1) The Edinburgh Review, Oct., 1832, p. 52.

2) Mill, J. S., Principles of Political Economy, 1848 (Ashley's ed., p. 75.)

革命の進行時代に相當し、またかの過渡的恐慌の頻發した時代に當つてゐる。¹⁾この點についてはハンター氏も特に注意してゐる。曰く、

『こゝに留意せねばならぬことは、チャーマーズの社會問題に關する著述は、各地に恐ろしき暴動を勃發せしめた程の非常な産業不安の時代に生産されたといふことである。²⁾』

さてチャーマーズに従へば、經濟學は決して理論の蓄積や眞理の探究ではない。それは國民大衆の物質生活を確保すべき實踐學の一つである。その故に經濟學はまた國民の精神生活を指導する宗教と結ばねばならず、經濟問題も結局する所は道德と教育に依存すると考へる。寧ろ彼れの經濟學は、ボナー氏の指摘するが如く、『經濟學の價值を認めた一人の宗教家として書いた³⁾』ものと言へる。即ちチャーマーズはその『經濟學』の序文に言つてゐる。

『經濟學は宗教家の教育における重要科目ではないが、併し宗教家の興味と義務とに深く關聯する一定の問題においては、極めて密接なる接觸がある。他のことはさておき、貧窮と教會制度の問題は、その理論的問題においてさへ、經濟學の教訓と原理に關聯する。……』

『經濟學の目的とするところは、人間享樂の外的手段および物質を増殖または擴大することによつて、多數人口の間に必要と安慰とを普及せしむるにある。』

『われゝの努力は、物的資源の増加には限界のあること、従つてまた殊に古き國においては、あらゆる社會を通じて壓迫と不快を感じ、これが一方では基督教教化の手段を超脱し、他方では基督教國の慣習と儀禮を廢棄することを證明するにある。⁴⁾』

かくして國民多數の物質生活を確保するには、富の絶對的増減よりも、寧ろその相對的増減即ち人口との關聯における富が、より重要な問題となつてくる。これ彼れの經濟學が、その人口

1) 拙著、恐慌に關する諸學說、本論第一章參照。

2) Hunter, *ibid.*, p. 12.

3) Bonar, *ibid.*, p. 255.

4) Chalmers. T., *On Political Economy*, 1832. Preface iii—iv.

論に立脚する所以であり、また人口法則を媒介として、經濟學は道德・教育および宗教と結びつく所以である。この點につき彼れは同じ序文に言つてゐる。

『ことに富の理論は、人口の理論と關聯して吟味されねばならぬ。その結果は大きな教訓——即ち經濟と道德との間に存する密接なる關聯——が得られる。その限り經濟學の最善の目的は、普通人民の間に行はれる分別と道德 (prudence and virtue) の力なくしては、實現することは出来ない……』

かれの人口論は殆んどマルサス人口論に近い。時にはマルサス以上に人口増殖の力を認める。

例へばマルサスでは『人口は妨げられざる時は、二十五年毎に倍加しつつ進む』となつてゐるが、チャーマーズでは『人口は、生活資料を無限に供せられて完全な發展を許される時は、十五年間に二倍となり得る』ときへ主張する。

かくの如き人口増殖力を認むる以上は、マルサスと同じく、如何なる經濟的進歩も貧窮を救済することは出来ない。食物の増加または勞賃の向上は、直ちに人口を増加せしめて、貧乏は永久に人類社會から免れ得ない必然の運命でなければならぬ。之を免れうる途はたゞ一つ、道德的抑制によつて人口制限の行はれるにある。即ち『勞賃の率は、人々の結婚に對する嗜好と、生活の安慰および儀禮に對する嗜好との割合に依存する』⁴⁾ 而してこの結婚に對する嗜好または道德的抑制は、個人道德の問題といふよりは、寧ろ一種の社會的制裁として成立すると考へる。曰く『集團心理および社會慣習の有する人口要素に對する無限の制限によつて、一國における享樂の一般的標準は、無限に向上することが出来る』と。これら人口と生活程度と道德的抑制との關係に關

1) Chalmers, *ibid.*, p. iv.
2) 拙譯、マルサス人口論、p. 20.
3) Chalmers, *ibid.*, p. 380.
4) *ibid.*, p. 274.

する所論は、殆んどマルサスの主張と同様である。

要するにチャーマーズの經濟學は、マルサス經濟學を繼承して、リカルド派經濟學に對抗するものと言へる。人口論を繞る諸の主張は勿論、地代論においても、重農説においても、貿易論においても、リカルド派に對立してマルサス説を支持し、結局において經濟は道德に攝取せられ、社會政策は教育事業に歸結することとなる。この一般的特質は、彼れの恐慌理論にも同様に反映して、リカルド派の恐慌否定説に對立して、マルサス派の恐慌肯定説を支持することとなつてゐる。以下この點につき検討するであらう。

三、チャーマーズの蓄積理論

恐慌に關するチャーマーズの見解を最も詳細に論じたるものは、彼れの『經濟學』の第五章である。ここでは『生産過剰もしくは一般的過剰の可能性に就いて』(On the possibility of Over-production, or of a General Glut)特に一章を充て、詳論してゐる。彼れはまづリカルドその他の生産過剰の否定論者が、不生産的消費を排斥して、生産的消費のみが國富を増進するといふ説を斥けて、生産的消費のみでは、富の蓄積は行き詰りに逢着することを主張する。彼れは先づ勞働階級を三種に分つて、第一次的必要品たる農産物の生産に従事する農業勞働者(Agricultural labourers)、第二次的必要品を生産する第二次勞働者(Secondary labourers)と、奢侈品の生産に従事する隨意

5) *ibid.*,

労働者 (Disposable Labourers) との區別を設け、これに従つて蓄積の行詰りを證明せんとする。曰く、

『労働者を三種類に分ける吾々の區分によつて、生産過剰の不可能または一般的過剰の不可能をいふ最近の逆理を否定することが出来る。この説を支持する彼等は、彼等が不生産的消費または不生産的支出と稱するものをもつて、國民にとり有害であるとする。』

いま彼等の主張に従つて、すべての國民が奢侈品の消費を節約して、必要品のみを消費し、すべての所得の餘剰を蓄積して生産の擴張に用ひたとする。然る時は彼等の主張に従へば、國富の蓄積は最も迅速に進行し、社會經濟上最も望ましき状態にあることとなるが、併しチャーマーズに従へば、この蓄積の進行は、人口増殖の法則に衝突して、遂に行詰りに到着せねばならぬといふ。

何故かといふに、今すべての奢侈品が節約される時は、奢侈品の生産は消滅し、その生産に従事したる労働者即ち彼れの謂はゆる隨意労働者は、その仕事を失つて第一次または第二次必要品の生産に移動せねばならぬ。その結果は必然に、第一次または第二次の必要品の生産を増加せしめ、そこに一時的には豊饒の時代を現出するかも知れぬ。けれども直ちに人口増殖の法則が追付いて来る。必要品の豊富は人口の過剰を呼び、人口の過剰は限界耕作地を推し擴げて、不饒の土地にまで農業を擴張せしめる。即ち之によつて社會全體の人口は増加し、物質的な必要品の總量は増加するかも知れぬが、國民の生活は却つて窮迫し、すべての國民は貧窮状態に陥らねばなら

1) Chalmers, T., On political Economy (1832) p. 137.

ぬ。この行詰り状態に達せざらんとせば、不生産的消費または奢侈的消費を節約することなく、あらゆる消費を盛んならしむるにある。然るときは第一次的または第二次的必要品の生産は、必然に制限されることとなるが、人口増殖の法則は道德的抑制の力によつて、必要品の生産程度に制限され、こゝに蓄積は行詰りなく進行することが出来るといふにある。

彼れはまづ第一に、農企業家が奢侈的消費を節約して、そのすべての利潤を蓄積したる場合を考へる。この場合には直接に農生産の擴張となり、限界耕作地の擴大となり、その結果は農産物の増加となる。従つてまた人口の増加となつて、國民の生活は却つて窮迫するのみならず、農企業家の利潤もまた、限界耕作の低下のために、低下または消滅せねばならぬ。即ち後に至つてミルの指摘するが如く、蓄積の結果は蓄積の動機と矛盾するに至ると主張する。曰く

『農企業家の極端な節約がわれ／＼に影響しうるものは、人口増加である。けれども社會は以前よりも、善き状態にはなつてゐない。家族の数は増大してゐる。けれども家族は以前に比べて少しも裕福とはなつてゐない。この生産擴張の結果、彼れはそのため自らの利潤を喪失した。彼れは社會の富の總量を何程か追加したけれども、之を構成する個人の繁榮または安慰には、何ものをも追加してゐない。』

次に第二種の資本家即ち第二次的必要品の生産に従事する企業家が、その利潤を節約して蓄積する場合には、彼れの生産擴張は直接には農産物の増加とはならない。けれども之によつて一方には第二次的必要品の増加となり、他方には奢侈品生産に従事した隨意労働者の農業への移動となり、そこから人口増加を惹きおこして、前の場合と全く同様の結果を來すこととなる。

『この資本家の慣習の變化によつて、隨意労働階級の一部は、前の場合と同様に、新たに擴張されたる農業に向つて移動する。またその結果として人口の増加すると共に、比例的に擴張した第二次的必要品の生産に向つて移動する。何れの場合でも、ここには労働者の安慰の一時的擴大がある。けれどもこれは享樂の標準にして同一に止まる限りは、直ちに人口の増加によつて追隨せられ、従つて相殺されるであらう。それ故に生産を無限に擴大せんとするこの第二の努力の結果もまた、第一の場合と同様に、極めて有限的な制限されたる結果に到達するであらう。それは利潤を喪失せしめる。それは社會の富の總量に何ものかを加へるであらう。けれども結局においては、または永久的には、個々の家族の繁榮および安慰には何ものをも加へないであらう。』

第三に奢侈品の生産に従事する資本家の蓄積についても、結局は同様の結果となる。たゞこの場合には、彼れはその蓄積部分をもつて自己の生産を擴張しえず、他の必要品生産に向けねばならぬ。そればかりではない。彼れの奢侈品生産そのものが消滅せねばならぬ。たゞこの場合にも最大の奢侈的消費をなす地主階級の節約と蓄積は最も重要である。地主階級の奢侈放棄と同時にすべての奢侈品生産は消滅し、すべての隨意労働者は移動し、同時に農業生産の擴大と人口増加とが結果せられて、社會の貧窮はますます甚だしくなる。

『地主の側における奢侈品の斷念と共に、農業はその自然的限界を遙かに超えて、進行することが出来るであらう。併しそれは無限ではない。最後の奢侈品が棄てられ、最後の一人が隨意労働人口から引あげられる時に、農業はその最大限度の限界に達するであらう。』

併しながらかくの如きは、決して現實の社會において實現しうるものでないことは、チャーマーズもまた主張する所である。何故かといふに、第一にすべての資本家および地主が、そのすべての奢侈的消費を節約して、全くの必要品のみに限定しうることは、事實上に不可能であり、第

3) Chalmers, *ibid.*, p. 142-143.

4) Chalmers *ibid.*, p. 145.

二にすべての利潤も地代も消滅せる場合に、何を好んで節約と蓄積を繼續する資本家または地主があらうか、即ち蓄積はこゝで全く理論的にも行詰らざるを得ないと主張する。

『若しもかゝる組織が一たび行はれたとしても、その利潤なきことのために、または多くの場合に積極的に損失し破綻することのために、それは急速に阻止されるであらう。それ故にそれは何らかの懸念する、實際的害惡の故にのみならず、われわれの構成しつゝある理論に反するものである。』

要するに彼れの蓄積理論は、まだ素朴の形においてはあるが、併し蓄積に伴ふ問題の意味は、すでにほぼ把握されてゐる。不産的消費と蓄積との關係に關する問題は、すでに先きにマルサスの問題とする所であり、この點においても彼れはマルサスを繼いでリカルドに反對するものである。また資本蓄積と利潤率低下との矛盾の關係については、後にジョン・スチュアート・ミルの詳論する所であり、彼れはその前驅をなすものと見ることが出来る。

四、チャーマーズの恐慌理論

Over-production or general glut の不可能を主張して、一般的恐慌を否定せんとする反對論者でも、謂はゆる部分的過剰は之を否定するものではない。一つ二つの商品は、需要に對する生産者の誤算のために、過剰となることはありうるけれども、總ての商品が一般的に過剰となるが如きはあり得ないといふ。その根據は人類の欲望の無限にある。この欲望に適應せざる場合において、或る物は不足し或る物は過剰することはありうるけれども、その過不足の間には常に勞働の

5) Chalmers, *ibid.*, p. 146.

6) 拙著、恐慌に關する諸學說(前掲書) p. 180.

7) 拙稿、ジョン・スチュアート・ミルの恐慌理論(經濟學研究昭和八年十二月號)

移動が行はれて、均衡状態に到達せんとする傾向がある。それ故にこの均衡状態を假想するならば、そこには部分的過剰の如きも存在し得ることとなる。この主張は果して正しいかどうか、欲望に對する商品の適合さへあれば、資本の蓄積と生産の擴張が如何に進行すとも、そこには何等の一般的過剰は起りえないかどうか、これがチャーマーズの問題とする所である。

さて先きに述ぶるが如く、いま資本家および地主の奢侈的消費を節約して、そこに資本を蓄積し生産を擴張したとする。然るときは先づ第一におこる變化は、チャーマーズに従へば農業の擴張であり、食物の増加である。従つてそこには食物の過剰が起りうる。たゞこの種の生産過剰は労働階級を一般的に窮迫せしむるものではない。況んやその一部を窮迫せしむるが如きことはあり得ないといふ。

『一國の食物がその人口に先在する限り、そこには労働者の間に一般的窮迫を惹きおこすが如き、すべての商品にわたる一般的過剰の危険はない。況んや労働者の或る階級に窮迫を齎すが如き部分的過剰の危険はより少い¹⁾。』

ところで食物の過剰は、さきに述ぶるが如く人口増加に導き、その壓迫から更らに農業擴張に導くこととなるが、農業擴張が限界に近づけば近づく程、國民生活は壓迫を免れない。而してイギリスの如き古き國と、アメリカの如き新開國との相違は、大體において右の限界耕作の遠近によるものと考へる。

『農業がその限界に近い程、壓迫はより感じられる。そしてその國の食物が最大量に達し、限界が停止してきた時に……壓迫は最大となるであらう。……労働階級の間に貧乏と窮迫を齎らす所のかゝる過剰が、最も屢々おこり來るのは、先進諸國にお

1) Chalmers, *ibid.*, p. 153.

いふのである。²⁾

かくの如き先進國の状態は、先づ第一に食物の過剰を可能ならしめ、次いで他の諸商品の一般的過剰を可能ならしめ、最後に人口の過剰を可能ならしめる。然らばこの状態は文字通りの總ての商品の一般的過剰ではない。チャーマーズは、³⁾で一般的に(Generally)と、普遍的に(Universally)とを區別して、なるほど商品の過剰は普遍的ではないが、一般的である。けれども生産力の過剰ならば普遍的にも存在すると主張する。

『そこには恰かも過剰の生産者があるから、過剰の生産物がありうるといふ明白な真理を、論者は看過してゐる。一般的過剰少くとも生活の第一次的必要品を除く總ての過剰がおこりうるのは之である。これらのものゝ缺乏があるから、過剰は普遍的でないといふのは、單なる遁辭に過ぎない。それ故にたとひ總ての種類の生活物を包含せしめるとしても、この主張は尙ほその根據を有する。たゞ之に適合するためには、一つの修正を要するに過ぎない。即ちたゞ食物といふ唯一の例外を認めて、一般的(Generally)には、生産物の過剰がありうる。また食物およびその他の總てを包含して、普遍的(Universally)には、生産力(productive effort)の過剰がありうる。³⁾』

以上は貨幣および信用を姑らく度外して、たゞ生産物そのものについて、そこには一般的過剰のおこりうる可能性のあることを主張したチャーマーズの所論であるが、このことは決して無意味ではない。蓋しリカルドその他の一般的過剰の否定論には、物々交換の理論にたつて、商品の供給は即ち他の商品の需要を意味するから、そこには一般的過剰は存在しえないと主張されて來たからである。⁴⁾

併しながら勿論そこに貨幣を介在せしめたとしても、同じ主張は寧ろより簡単に證明されると

2) Chalmers, *ibid.*, p. 154.
3) Chalmers, *ibid.*, p. 157.
4) 拙著、恐慌に關する諸學說參照。

いふ。即ち『反對論者の結論における誤謬を論證するのみならず、彼等の議論の據つてたつ假定における誤謬をも指摘する』⁵⁾ことが出来る。そのみではない。『更にそれ以上に有利なことは、農業の限界に全く論及することなくして、普遍的過剰の可能性を論定することの出来る點にある』⁶⁾といふ。然らばその論證は如何になされるか？

いま一國の總資本を一億とし、一回の回轉によつてその一割即ち一千萬の利潤を齎らし、之を消費しつゝ支障なく進行しつゝあるとする。この場合に消費生活の節約が行はれて、例へば地主階級の節約が一ヶ年二千萬に達し、之を銀行を通じて資本に追加したとすれば、社會の總資本は一億から一億二千萬に増加するであらう。従つて社會の總生産物はその割合をもつて増加することとなり、之に對する購買力は、却つて以前よりも減少してゐるから、そこには必然に生産過剰が起らねばならぬ。即ち『一方から他方に移つた二千萬は、少くとも一年間は、生産と消費との均衡を覆へすであらう。そしてこの年には生産過剰またはGIEがそこに存在する。……何れにせよ商品に投資されたる一億二千萬の資本は、購買者の側における九千萬と對立するわけである。』⁷⁾かくの如く彼れが消費者または商人の購買力を重視したことは、當時においては注意すべき點であらう。

『消費者が一定の商品を拒絶したからといつて、それは必ずしも論者の考ふるが如くに、その代りに他の商品を買はんがためではなく、一般的購買力をそのまゝに留保せんがためである。また商人が市場に商品を持出す場合にも、一般には之に對して與へられる他の商品を得んがためではなく、總ての商品に對する一般的購買力を擴大せんがためである。』⁸⁾

5) Chalmers, *ibid.*, p. 161.
6) Chalmers, *ibid.*, p. 161.
7) Chalmers, *ibid.*, p. 163.
8) Chalmers, *ibid.*, p. 164.

生産過剰の可能性に關する彼れの主張は、さらに信用の介在によつても毫も影響されるものではない。何となれば信用制度の介在は、彼れに従へば、たゞ他人資本の利用をなしうるに過ぎない。従つてそこにはたゞ生産擴張の可能性を増すに過ぎないから、彼れの立論はより容易に主張される。蓋し前の場合には、一億から一億二千萬への生産擴張は、地主の消費節約を前提せねばならなかつたが、信用の介在する場合には、この前提なくして生産擴張を考へ得られるからである。

『一般的に言ふときは、人々が信用の上に事業をなす場合には、そのために起る唯一の相違は、彼等が自己の資本をもつてゐなく、他人の資本をもつてするといふ點にある。そしてこの場合にも、資本の問題に關するわれ／＼の結論の修正に導くが如きことは毫もない。……』

『何れにせよ信用の現象は、資本の問題に關するわれ／＼の見解に對して、最も完全に満足に合致する。多數の破綻によつて惹きおこされた大なる商業窮迫の時代には、その損害は多數の商人が自己資本を以つて商賣する代りに、信用の上で商賣してゐたからであると屢々言はれてゐる。併しこの事情そのものこそ、資本は如何なる國においても、一定の限度を超えては進行し得ないことを證するものである。……かゝる結果を惹きおこした所以は、單にこれらの商品が、一部は資本により一部は信用により製造されるといふ事情ではない。これはたゞ有効需要を超過して商品が過剰に生産されたからである。この過剰は、商品の一部が資本により一部が信用により生産される代りに、全部が資本により生産されやうとも、全く同様である。』

要するに今日の如き貨幣および信用の發展せる時代にあつては、一般的なる生産過剰は、極めて容易に起り來る可能性がある。そこでは地主または資本家の積極的な消費節約が行はれずとも、相對的の消費節約即ち蓄積部分以下の消費生活が續く限りは、資本蓄積の加はると共に、一般的なる生産過剰従つてまた一般的恐慌は、免るべからざる必然であると主張する。

彼れの主張または理論の中には、可なり批判の餘地を存してゐる様である。これが詳細なる批判は別の機會にゆづり、こゝでたゞ一二の點を指摘するならば、第一にかれの理論の基底となつてゐるマルサス人口論は、その後に至つて多くの批判を免れなかつたものである。けれども人口増殖の原理は、必ずしも彼れの考ふるが如くに、生産過剰と必然の關聯にはない。彼れにおける人口の原理は、寧ろ生産過剰を説明せんための借りものであつて、この點において彼れの計畫は成功とは言ひ難い。たゞ彼れはミルの批評する如く、*At first hand*に事實を把握して、然る後この事實を説明せんとして理論的根據を借り來れるものである。また彼れの極端な重農思想や輕商主義も問題であり、ことにチャーマーズにおける特徴は、生産過剰または恐慌の週期性を認めるまでに至つてゐない點にある。従つて生産過剰または恐慌の影響が、直接には寧ろ企業家の困窮となつて現はれることを明らかにせず、他の一面たる勞働者の窮迫にのみ眼を奪はれてゐる。これは彼れの社會的存在より必然に來る所であり、宗教運動家または社會改良家としての彼れの面目もそこにあるものではあるが、之を純然たる恐慌理論として見るときは、そこにも尙ほ批判の餘地を残すことゝなつたものである。